

## イスラム・テロと風刺・批判

2015年2月10日

日本国際フォーラム参与  
元駐ポルトガル大使  
原 聰

本年1月イスラム過激派による週刊シャルリ襲撃テロ事件は世界を驚愕させた。その翌週、同紙は「すべては許される」との見出しの下で、涙を流すムハンマドを描いた風刺画で表紙を飾った。



(出典：<http://dontena.doorblog.jp/archives/42281261.html>)

この一連の出来事は、宗教とは何か、批判は全て自由か、という極めて重要な問題を提起した。そこで、異文化との接点で仕事をしてきた筆者の経験を基に、読者の皆様とともに、宗教、テロ、政治、批判・風刺などについて検討吟味してみたい。

1. まず、「宗教とは何か」。人々の中には、自分を超える超越者の存在を認め、それを信じ、その導きによって自分の生き方を定めていく信仰者がいる。そうでない人は無神論者となるだろう。

そもそも宗教は「人の心の中」の問題である。「宗教は極めて個人的な、内的な事柄であり、そのような信仰や宗教は、他人によって批判されたり、風刺されたりしてはならない」との見解は多くの人々の賛同を得るだろう。

2. しかし、歴史が示す如く、宗教は政治や国家、人種や民族と密接に結びついて進展してきた。宗教は、「心の中」を飛び出して政治権力と緊密に連携し、政治を利用したり、されたりして、一つの「宗教的権威」にまで発展したことも事実である。

中世のキリスト教は正にそうであった。イスラム教の場合、その聖典「クルアーン Qur'an」に記されているように、「心の中」の宗教に留まることなく、そこから広がって社会・経済生活の規範そのものとされ、信者たちの心も生活も規定する宗教である。現在のイスラム諸国の中には政教一致の政治制度を持った国が結構見られる。

そのような政治権力と結びついた宗教は上に述べた「人の心の中」の宗教ではもはやない、とするのが、ルネサンス・宗教改革以降ヨーロッパに起こってきた啓蒙思想である。

3. 啓蒙思想とは、それまでのカトリック教の宗教的権威を批判して、人間的・合理的な思考・理性の重要性を唱え、政治、社会、芸術、経済、哲学など人々の生活すべてを宗教のくびきから解放する思想・運動といえる。これが最も華々しい形で現れたのが、フランス革命であろう。

今日、日本人は民主主義を信奉している。そこで最も基礎となる価値観は、思想・言論・報道の自由であり、また信仰の自由である。人は欲望に弱く、権力を手にした人は欲望に支配されがちであることは、歴史が示している。従って、あらゆる政治権力は、言論・報道の自由によって間断なく批判に曝され続けることが必要である。ここに、フランスにおける批判精神の神髄がある。シャルリ風刺画はこの観点を抜きにしては語れない。

4. では、週刊シャルリはこれまでどのような風刺画を掲載してきたのか。是非インターネットでご覧いただきたいが、週刊シャルリは、カトリック教、イスラム教、ユダヤ教などの諸宗教はもちろん、フランス内外の政治、社会についてかなり辛辣に風刺してきている。また、その風刺画には性描写も結構見られる。特に、次の風刺画のように宗教と性が絡めて描写されると、信仰者はかなり激しい宗教批判と受け止めることになるだろう。



(出典: <http://blog.livedoor.jp/nappi11/?p=2>)

5. では、政治的権威・権力と結びついた宗教について、ペンはどのような言論・批判・報道の自由を享受するのだろうか。

その判断は人によって異なるだろう。①一切の批判を許さない、②宗教の権力との結びつきの程度によって、ある程度の批判を受けるのは当然である、そして、③全ての批判は自由である、と判断は分かれるに違いない。信仰を持つ人は①に傾くだろうし、無信仰の人は③に傾くだろう。

6. 今回の週刊シャルリ襲撃事件について、筆者は次のように考え、訴えたい。

(1)まず、イスラム過激派による襲撃テロについては、「神(宗教)の名におけるテロ殺人は一切認められない。それはむしろ神を冒瀆している」と考える。あらゆる宗教戦争は、宗教を政治的手段として利用していることであり、宗教の本質である「心の中」の信仰にそもそも反する。テロ殺人を勧める宗教など排除されねばならない。

(2)事件後の週刊シャルリによるムハンマドの風刺画掲載については、イスラム教が「心の中」の問題のみならず日常生活まで規定している宗教であり、かつ、世界のイスラム教国の相当数が宗教と政治権力を渾然一体として取り扱っている現状から判断して、掲載された程度の風刺画は許されてしかるべきものであろう。

他方、これまでの週刊シャルリの宗教風刺画の中には、性を含めた風刺画も結構多い。いやしくも信仰を持つ人々にとってイエス・キリストやムハンマドは信仰の中核的存在である。自分たちが無神論であるとしてシャルリ編集者たちが上記のような風刺画を報道したとしても、余りにも卑猥かつ下賤であり、度を過ぎている。もっと他人の価値観や信仰を尊重し敬意を払って、品格を持った風刺を励行してもらいたい。

(3)最後にイスラム教では、クルアーンを有権的に解釈できる「センター」が欠如しているという本質的問題がある。カトリック教におけるローマ法王庁のような有権的解釈センターがイスラム教には存在しない。各地のイスラム教指導者(イマーム)たちがそれぞれ独自にクルアーンを解釈して、それを人々に教えている。それ故に、ある国のマドラサ(学校)では子供たちに対し、本来イスラムの道のために努力するという意味の「ジハード(奮励努力)」を「異教徒との聖戦」の意味であると強調して、自爆テロにより天国へ召されることは名誉なことだと教育している。

世界中のイスラム教徒に訴えたい。クルアーンは異教徒たちをテロにより殺すことを認めていない、イスラム過激主義者たちは真のイスラム教徒ではない、そして、他の宗教との共存を認めるのがイスラム教である、と声を大にして主張して欲しい。更に、クルアーンはそのようなものであると有権的に解釈できるイスラム教「センター」を設立してもらいたい。筆者は、イスラム教徒の人々にそのようなジハード(努力奮励)を期待したい。

(了)